次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「東洋と西洋」という問題設定に関して重要なテキストは、漱石の講演『現代日本の開化』である。これは『私の個人主義』と並んで、高校国語の教材として多くの教科書に掲載され、小説とはまた別の漱石の代表作とされている。この有名な講演で、漱石は、西洋の開化＝近代化は「内発的」だったのに対し、日本の近代化は「外発的」だったという。数百年という時間をかけて達成された西洋の近代の水準に、日本はほんの数十年で追いつこうという努力をし、ある意味でそれに成功してしまった。科学技術や制度を取り入れることには成功したものの、その超スピードでの変化が日本人の精神にもたらした不安こそが重大な問題であるという講演だった。

近代という一般的な言葉について、「西洋の近代／日本の近代」という区別をおこなったこと、それぞれの性格に対して「内発的／外発的」という用語を与えたこと、そして他者の歴史を生きることになった日本の不安を問題化したこと、こうした点で、この講演はその後、日本の近代を語る際の決定的な（　Ａ　）になったのである。漱石はこの認識を小説『それから』のなかでも、主人公の口を借りて語らせている。『それから』の主人公・長井代助は資産家の次男で生活のために働く必要のない、いわゆる「高等遊民」である。その代助が、旧友に向かって自分が働かない理由をつぎのように説明している。

　なぜ働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もっと、大げさにいうと、日本対西洋の関係が駄目[B]だから働かないのだ。（中略）日本は西洋から借金でもしなければ、到底[ア]立ち行かない国だ。それでいて一等国をもって任じている。そうして、無理にも一等国の仲間入りをしようとする。だから、あらゆる方面に向かって、奥行きを削って一等国だけの間口を張っちまった[C]。なまじい張れる[D]から、なお悲惨なものだ。牛と競争する蛙（かえる）（『イソップ物語』の寓話（ぐうわ）。分不相応なことのたとえ）と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。その影響はみんなわれわれ個人の上に反射しているから見たまえ。こう西洋の圧迫を受けている国民は、頭に余裕がないから、ろくな仕事はできない。ことごとく[E]切り詰めた教育で、そうして目のまわるほどこき使われるから、そろって神経衰弱になっちまう。話をして見たまえ、大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、ただ今の事よりほかに、何も考えてやしない。考えられないほど疲労しているんだから仕方がない。……

『現代日本の開化』とともに、『それから』のこの一節は、その後、繰り返し引用され敷衍[F]（ふえん）されて広く流通していった。「漱石」はこの点で、ついに「文明批評家」として、つまり単なる小説作家ではない思想家として位置づけられるようになったのである。問題になっているのは「東洋においてユイイツ[イ]近代化に成功した日本」である。政治や経済の文脈では、この言いまわしが現在でもしばしば楽天的な自慢話になるのだが、文化の文脈においては、逆に不幸の源泉として語られてきた。たとえば文芸評論家の中村光夫（一九一一―八八）は一九四二年（昭和17）に発表された「『近代』への疑惑」という文章のなかで、つぎのようにこの代助の言葉を引用している。

　西欧文明のタクみ[ウ]な採用によるわが国運の急速なタイトウ[エ]は人種的自負に満ちたヨーロッパ人自身が奇跡[G]と呼んで賞賛するに躊躇[H]（ちゅうちょ）しないところである。（中略）

　だがこの「奇跡」は果たしてその背後にどれだけの犠牲を払って得られたか。この必要によって強制された急激な生活様式の変転が僕らの精神をどのような混乱に導いたか、いわばこうした無慈悲な時代の要求は、それにやむを得ず適合して生きた精神をどのように歪めたか。おそらくここにわが国の「近代」が僕らに提出するもっとも切実な問題[I]があるのではなかろうか。（中略）

　明治大正時代のわが国はふつう西洋文明消化の時代であったといわれている。だがそれは内面から見れば、急激に強制された応接の暇（いとま）のない西洋文明の輸入のために、僕らの精神が消化不良を起こした時代であったのではなかろうか。漱石は「それから」の代助の口を藉（か）りて当時の日本を「牛と競争する蛙」に譬（たと）え、「もう君、腹が裂けるよ」と書いている。

中村光夫がこの文を書いた一九四二年（昭和17）は太平洋戦争開戦の翌年にあたる。当時の日本は、[J]「西洋」を敵とみなして戦っていた。この状況に対応するようにして、当時の文化人たちのあいだでは、西洋近代の克服と日本の主張といった強気の語りが主潮流となっていた。中村光夫のこの文も「近代の超克[オ]」と名づけられた座談会のために用意されたレポートである。この文に見られるとおり、中村光夫は決して米英への「挑戦」を豪語[カ]する強気の日本論者ではない。「牛と競争する蛙」というのは、[K]思慮深い見解だったとも言えるだろう。[L]、強気か弱気かは別として、文化の面で「植民地化」されたという日本の不幸を語る彼の発想の枠

組みは、西洋を外側からやって来た【キ】ワザワいとして、［Ｍ］「敵」として意識していたこの時期の空気に、やはり規制されたものだった。

こうした被害者としての位置取りは、［Ｎ］当時の日本がアジアの「植民地化」を文化的にも政治的にも進めていたことを覆い隠す機能があった。単に覆い隠すという以上に、欧米帝国主義の多年にわたる抑圧・支配から、アジアの諸民族を解放する、という「大東亜共栄圏」の【Ｏ】レトリックにおいて、西洋からの被害、アジアへの加害は切り離しがたく連動している。一九一六年（大正５）に没した漱石は昭和の戦争のことを知るよしもないが、漱石のあずかり知らぬ時代状況のなかでも、彼の言葉が繰り返し引用されたのである。

その後も漱石の言葉を参照しながら、膨大な量の「日本近代」論が書かれ、また教科書をとおして、たくさんの高校生が「西洋対日本の関係」がもたらす問題の重大さを読むことにもなる。高校生が西洋の圧迫によって苦痛を感じたり、国を憂えたりするというのは、なんとなく奇妙な図であるが、高校生にとってだけではない、じつは漱石自身にとっても「日本対西洋の問題」という問題意識は、もとはと言えば、いわば「外発的」な着想だったのだ。漱石の恩師であったＪ・マードック（一八五六―一九二一）に『日本歴史』という著書があるが、これが漱石の着想源のひとつであるらしい。

漱石は一八六七年（慶応３）生まれだから、彼は明治の元号年とほぼ一緒に年齢を重ねていった。明治期のさまざまな変化は漱石の成長と並行的に進行していたのであり、漱石自身はその変化をとくに「急激」であるとか苦痛に満ちたものだとか、考えてはいなかった。「飛行機のなかにいると、自分がものすごいスピードで進んでいることを忘れるようなものである。海軍が進歩したことも、陸軍が強大になったことも、工業が発達したことも、学問が発展したことも、その変化とともに成長した漱石にとっては「当たり前さ」というくらいにしか感じ取られなかった。だが、西洋人のマードック先生の目には、それが「当たり前」とは映らなかった。漱石の「マードック先生の日本歴史」という文によると、先生は「維新前は殆（ほとん）ど欧州の十四世紀ころのカルチュアーにしか達しなかった国民が、急に過去五十年間において、二十世紀の西洋と比較すべき程度に発展したのを不思議がる」のだった。

【Ｐ】西洋人が驚嘆の眼で日本の近代を見つめている。そのまなざしを受け止めた漱石は、日本の近代がいかに普通でないかを意識しはじめ、そして西洋の近代とは違う日本近代の特殊性を問題化し、それについて思考しはじめるのである。自己のアイデンティティー（存在証明）は他者のまなざしを受け止めて、反発したり受け入れたりすることによって確立するというが、この場合の「日本近代」という自己意識も、まさにそのように成立したものだった。【Ｑ】逆説的なことに、日本という自意識の成立事情は、決して「内発的」なもので

はなかった。

戦後すぐの国語教科書は、「民主的」社会の確立と、それを支える「近代的」な主体性をそなえた自律的な個人の確立を打ちだしていた。だが「鷗外と漱石」という単元設定は、やはり「近代」をテーマにしてはいるものの、いまや、それはカクトク[ク]目標ではなく、逆に明治以来の日本が抱え込んできた矛盾となった。

猪野謙二の「鷗外と漱石」では、これに続けて、鷗外が文学を「遊び」「あきらめ」として位置づけていたことを紹介している。私たちのイメージする森鷗外は小説家であるが、彼の本職は陸軍軍医だったのであり、事実として彼には文学に生涯[R]を賭けるといった意識はなかった。だが、それにしても「遊び」「あきらめ」という極端に消極的な言い方を選んでいるのはなぜなのか。教材「鷗外と漱石」を見てみよう。

> それは一口に言うと、彼が当時の日本の社会の発展ぶりを、どこまでも歴史の下り坂をたどりつゝあるものと見て、しかもこれに対して、いつも古い封建時代の武士社会の、しっかりとした「秩序」と「形式」や、またそこにおける人間のきびしい「意志」の力を慕う[ケ]心が動いていたということなのです。それは、いわば彼の魂のふるさとだったわけです。そしておそらく、そこにこそ、鷗外がそのころの新しい近代社会の秩序のない末期的なありさまや、ちっぽけな人間の姿をそのまゝに写していく「近代小説」を、自分の仕事として発展させていこうとする気持になれなかった理由があるのでしょう。——とにかくこのようにして、やがて彼は新しい「歴史小説」の創作に向かったのでした。

鷗外は歴史を過去にさかのぼって、そこに失われた秩序と偉大な人間を見いだそうとする。ここに提示されたのは、近代の歴史を「歴史の下り坂」ととらえる見方であり、歴史は進歩し発展するという「上り坂」の方向性は、ここで完全にひっくり返されている。なにより、外的な権威に頼らない自律的な個人という近代人のかたちは「（　S　）」へと収縮させられている。そして「近代小説」から「歴史小説」に方向転換していった鷗外の眼をとおして、「封建時代」の「秩序」が再発見されているのである。

では、漱石のほうはどうだろうか。教材「鷗外と漱石」では、漱石の遺作となった『明暗』を「人々のエゴイズム[T]とエゴイズムが果

てしなくもつれ合う、醜い近代人の心理の世界」と要約している。いまや近代人はちっぽけなだけでなく、醜いものとなった。そして漱石は午前中に、その『明暗』の連載一回分を書いてしまうと、午後には南画を描いたり漢詩を作ったりしていたというエピソードが、これに続く。漱石は午前中を「醜い近代人」の分析に費やし、午後にはいわゆる「則天去私（そくてんきょし）」（我執（コ）を捨て自然に身をまかせる生き方）の東洋風の悟りの境地に遊んで精神のバランスをとったというのだ。

戦後すぐには、個人としての主体性の確立という項目は目標の第一番目に挙げられていた。外的な権威・権力に盲従するのではなく、一人ひとりが判断の主体となることが民主的な社会の基本だとされていたのである。だが個人主義は、そうした自律的個人、主体性をもった個人という理想像ではなく、利己的個人主義というマイナスイメージへと収縮している。

その後の国語教科書では、「エゴイズム」は醜いものです——という保守的なメッセージの声量が上昇するのだが、この文脈で一九六〇年代以降クローズアップされたのが、漱石の小説『こゝろ』である。自分の裏切りのせいで親友が自殺して、ついには自分も自殺するという物語が「エゴイズムの醜さ」を描いたものだとされたのだ。教科書は、利己的個人主義はいけません——という論点に力を入れてきたのである。利己主義はよろしくないにせよ、戦後初期の社会的な「個人」はどこへ行ったのか、疑問は残る。

（佐藤 泉『漱石 片付かない〈近代〉』より）

問一 （ A ）に当てはまる語句として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 1

1 分水嶺 2 妥協点 3 参照枠 4 挑戦状 5 紋切型 6 試金石

問二 「駄目（B）」とあるが、「駄」を含む語句として**適当でないもの**を、次の中から一つ選べ。 2

1 駄文 2 駄句 3 駄弁 4 駄作 5 駄足 6 駄賃

問三 「奥行きを削って一等国だけの間口を張っちまった」とあるが、どういうことか。説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 3

1 アジア諸国との関係を断ち切って、西洋との交遊にのみ目を向けたということ。
2 国内の資源や財源を浪費して、西洋との外交関係にのみ力を入れたということ。
3 国民の自由を犠牲にして、西洋人を優先する制度を性急に打ち立てたということ。
4 西洋の抑圧からの解放という虚言を弄して、米英への敵対心を尊大に宣言したこと。
5 日本古来の伝統的な史跡をとりこわして、西洋的な建造物のみを量産したということ。
6 歴史的な文化の成熟をないがしろにして、表面的な改革のみをとりつくろったということ。

問四 「なまじい」の意味として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 4

1 完璧に　2 性急に　3 不自然に　4 能力的に　5 現実的に　6 中途半端に

問五 「ことごとく」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 5

1 あえて　2 くまなく　3 やたらと　4 しっかりと　5 ていねいに　6 ばらばらに

問六 「敷衍（ふえん）」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 6

1 意味を曲解して使うこと
2 言葉を広く知らしめること
3 言葉をにごして説明すること
4 意味を押し広げて説明すること
5 意味を簡略化して説明すること
6 意味を自分なりに解釈すること

問七　「奇跡」G の反対語として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。［7］

1 必要　2 当然　3 事故　4 だめ元　5 作り事　6 めぐり合わせ

問八　「躊躇（ちゅうちょ）」H と同じ意味を表す熟語を、次の中から一つ選べ。［8］

1 五里霧中　2 当意即妙　3 言語道断　4 暗中模索　5 曖昧模糊（もこ）　6 優柔不断

問九　空欄［J］・［K］・［L］・［M］・［N］に入る語句の正しい順序を示しているものを、次の中から一つ選べ。［9］

	J	K	L	M	N
1	逆に	むしろ	だが	まさに	つまりは
2	だが	まさに	むしろ	逆に	つまりは
3	まさに	逆に	むしろ	つまりは	だが
4	まさに	むしろ	だが	つまりは	逆に
5	むしろ	まさに	だが	逆に	つまりは
6	つまりは	むしろ	逆に	まさに	だが

問十　「レトリック」O の意味として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。［10］

1 作為　2 国策　3 信仰　4 修辞　5 概念　6 論点

問十一　「西洋人が驚嘆の眼で日本の近代を見つめている」P とあるが、その理由として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。［11］

1 文明の進んだ西洋人が驚くほど日本の近代化は水準が高い。
2 西洋人は日本の近代がアジアの植民地化と結びついていくことに驚いている。
3 近代を築いてきた西洋人は、日本の近代が矛盾を孕(はら)んでいることを憂えている。
4 西洋では数百年かけてなされた近代の発展が、日本では五十年ほどで実現したことに驚いている。
5 西洋の近代化が「内発的」だったのに対して、日本の近代化が「外発的」だったことを不思議に思っている。
6 人種的な自負に満ちた西洋人にとって蛙にたとえられる日本人が、一等国の仲間入りをしたことに驚いている。

問十二 「生涯」[R]とあるが、「涯」を含む語句を次の中から一つ選べ。 [12]

1 がいかくとく　2 きそうてんがい　3 じんちくむがい
4 てんがいこどく　5 だんがいさいばん　6 だんがいぜっぺき

問十三 夏目漱石の作品として**適当でないもの**を、次の中から一つ選べ。 [13]

1 門　2 行人　3 草枕　4 三四郎　5 山椒大夫　6 彼岸過迄

問十四 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。 [14]（[14]の欄に、二ヵ所マークすること）

1 戦後の国語教科書では、鷗外と漱石の作品をとおして、近代日本の矛盾が主題化されていた。
2 戦後の国語教科書では、鷗外と漱石の作品をとおして、外的な権威と秩序の復権が模索されていた。
3 戦後の国語教科書では、西洋の圧迫によって苦痛を感じる被害者としての日本の立場が着目されていた。
4 森鷗外は「歴史小説」を、近代日本社会の末期的な姿を憂えながら書いた。
5 森鷗外は「歴史小説」を、「秩序」の理念を尊ぶ陸軍軍医としての立場から書いた。
6 森鷗外は「歴史小説」を、「遊び」や「あきらめ」という東洋的悟りの境地から書いた。

問十五　「到底」・「超克」・「豪語」・「慕う」・「我執」の読みをひらがなでしるせ。
（傍線部：ア 到底、オ 超克、カ 豪語、ケ 慕う、コ 我執）

問十六　「ユイイツ」・「タクみ」・「タイトウ」・「ワザワい」・「カクトク」を漢字でしるせ。
（傍線部：イ ユイイツ、ウ タクみ、エ タイトウ、キ ワザワい、ク カクトク）

問十七　「わが国の「近代」が僕らに提出するもっとも切実な問題」とあるが、その内容を示す言葉を文中よりそのまま抜き出してしるせ（二十字）。
（傍線部：I）

問十八　（　S　）に入るものと同じ語句を、文中よりそのまま抜き出してしるせ（九字）。

問十九　「エゴイズム」とあるが、それと同じ意味の言葉を文中よりそのまま抜き出してしるせ（四字）。
（傍線部：T）

問二十　「逆説的なことに、日本という自意識の成立事情は、決して「内発的」なものではなかった」とあるが、それはどういうことか。文中の語句を用いて説明せよ（六十字以内）。
（傍線部：Q）

問二十一　戦後、個人のとらえ方はどのように変わっていったと筆者は考えているか。文中の語句を用いて説明せよ（六十字以内）。

国　語　　解答例

問	解答
問一	③
問二	⑤
問三	⑥
問四	⑥
問五	②
問六	④
問七	②
問八	⑥
問九	④
問十	④
問十一	④
問十二	④
問十三	⑤
問十四	①
	④

問		解答例
問十五	ア	とうてい
	オ	ちょうこく
	カ	ごうご
	ケ	したぅ
	コ	がしゅう
問十六	イ	唯一
	ウ	巧
	エ	台頭
	キ	災ぃ　（「禍」も可）
	ク	獲得
問十七		他者の歴史を生きることになった日本の不安
問十八		ちっぽけな人間の姿
問十九		利己主義
問二十		急速な日本の発展を当然としていた漱石は、西洋人の驚嘆の眼を通じて外発的に、日本近代の特殊性を自覚するに至ったということ。
問二十一		戦後初期は個人としての主体性の確立が目標とされていたが、やがて利己的個人主義というマイナスイメージへと収縮していった。